

令和7年度 山口県立大学 国際文化学部 情報社会学科

学校推薦型選抜（県内高校卒） 「小論文」問題用紙 (持ち帰り可)

次の文章を読み、以下の問（問1、問2）に答えなさい。

流行語にもなった「インスタ映え」に象徴されるように、インターネットと接続した撮影機能をもつメディアの普及は、私たちの目に訴えかけるコンテンツ文化の発達を促し、視覚情報の拡充をもたらした。インターネット上で「映える」写真には一定の特徴があると解され、どうしたらフォトジェニックな写真が撮れるのかを指南するサイトは枚挙に暇がない。そうした写真を「映え」させる特徴のなかで、空間や場所性と密な関係にあるのが「非日常性」であり、ここで有力な被写体となっているのが、神社仏閣などの宗教的な聖地である。

たとえば、筆者が長年足を運んできた恐山（青森県むつ市）も、例に漏れず格好の撮影スポットとなっている。恐山は寺院境内地であると同時に、死霊の集まるヤマと信じられる山岳霊場である。火山帯特有の荒々しい岩肌と立ち昇る噴煙、青緑色のカルデラ湖が織りなす“地獄極楽”さながらの奇観は、信仰と観光の両面で多くの人びとを魅了してきた。

インターネット上には、霊場内を映したたくさんの写真がアップされている。試みに「Yahoo! JAPAN」を使用して「恐山」の語で画像検索してみると、2019年1月1日現在、約394,000件の画像がヒットする。また、「Google マップ」の場合、「ストリートビュー」では霊場の入口までしか視認できないものの、マップの位置情報と紐づく形で、境内を映した906枚の写真を見ることが可能だ。

とはいえ、「映える」構図や被写体があるため、当然のことながら、写されている景色には偏りがある。「Google マップ」の906枚に関していえば、全体の26.3%は「死者のヤマ」のイメージに相応しい地獄エリアを撮影したものとなっており、続いて安置物（石仏・石塔・石碑）14.2%、山門 13.0%、宇曽利山湖・極楽浜 12.4%、寺院（本堂・地蔵殿）7.4%と、5タイプほどの被写体で全体の7割以上を占めていた。こうした被写体の偏りは、対象の選択／その他の捨象というメディアによる表現行為の特性に由来した、情報の死角を物語るものといえよう。

だが、このメディア自体にもともと内在する限界性とは別に、恐山には視覚情報の欠落した、「見えない」場所が存在している。一般開放されている場所であるにもかかわらず、カメラでの撮影が禁止されている、もしくは撮影行為が是とみなされないような場所があるのだ。それは、どこか。一つ目は宿坊、二つ目は本尊を安置する本堂と地蔵殿、三つ目は賽の河原の八角円堂（地蔵堂）である。このなかで、聖地の宗教性と直結してくるのが、本堂・地蔵殿と八角円堂である。

本堂と地蔵殿は当地における仏教信仰の中心地に当たり、死者供養の道場である前者に対して、後者は現世祈禱の道場と、各々が異なる機能を担ってきた。二つの施設は、従来、多くの参詣者たちに開かれてきた場所である。ただし、視覚的な接触に関していえば、許されているのは人間の「目」による接触のみである。現在、本堂と地蔵殿には「堂内撮影禁止」の札が掲げられ、メディアのまなざしは明確に拒絶されている。

広い霊場の敷地内には、自然物から人工物に至るまで、数え切れぬほどの信仰対象や聖性を帯びた場所が点在している。しかし、対外的に撮影禁止が明示されている箇所は、本堂と地蔵殿くらいしか見当たらない。霊場を構成する他の要素との違いがあるとすれば、それは、これらの施設が恐山菩提寺の本尊諸仏を安置する、信仰上の要所とみなされる点だろう。

聖地において、中核をなす信仰対象が撮影禁止となっていることは、珍しいことではない。想定される理由は、文化財保護やプライバシー保護の観点に立つ合理性に依拠した理由と、信仰対象への崇敬の念・信者への配慮という宗教性に基づく

理由である。恐山の場合も、両方の理由が作用していると考えられるが、死者供養というセンシティブな信仰に特化した当地では、とりわけ後者の面が強く意識される。この“メディアのまなざしを拒む力”の作用を顕著に示すのが、地蔵菩薩を納める八角円堂だ。

八角円堂に撮影禁止の文言は掲げられていない。だが、そのなかは非常に写真撮影のしづらい場所となっている。それは、この堂が故人の遺品を納めるための場所となっているからだ。狭い室内には、生前に故人が身につけていた衣服や持ち物がひしめき合う。これらの奉納品は、いやがおうでも死者のリアリティと遺族の想いを実感させるものであって、撮影に躊躇^{ちゅうちよ}を覚える人は多いだろう。たしかに、内部を映した写真がインターネット上に皆無なわけではないものの、他所に比して数は少ない。

つまり、カメラのレンズを通じて構成される情報領域上の〈恐山〉では、参詣者や寺院サイドが特に強く聖性を感じ「重要だ」とみなしている場所、すなわち、実際の聖地空間で聖性の中枢となっている場所は、「見えない」状態となっているのである。

(出典：藤野陽平・奈良雅史・近藤祉秋 編、『モノとメディアの人類学』，ナカニシヤ出版，2021年，66～68頁より。出題の都合で、問題文の一部を改変した。)

問1 下線部「情報の死角」とは、どのようなことなのか、200字以内で説明しなさい。

問2 出題文を踏まえて、二重下線部「『見えない』状態」が存在することの意味について、あなたの考えを600字以内で述べなさい。

大道晴香「第5章 メディアのまなざしを拒む場所：視覚情報の欠如から「聖地」と「カメラ」の関係を考える」（藤野陽平・奈良雅史・近藤祉秋（編）『モノとメディアの人類学』ナカニシヤ出版所収、2021年、66-68頁）

令和7年度 山口県立大学 国際文化学部 情報社会学科
学校推薦型選抜（県内高校卒）「小論文」出題意図と評価基準

出題採点委員

（１）出題意図

筆者は、インターネット上での視覚情報が拡充している現状を紹介しながら、その動向には、対象の選択／その他の捨象というメディアによる表現行為の特性が影響していることを指摘している。

本問のねらいは、第一に、そのような情報伝達の特性について、出題文より関連事項を的確に抽出し、自分なりに説明できるかの能力を問い、

第二に、メディアのまなざしを明確に拒絶する文化的要素が存在することを読み取り、そのことを説明させることで、情報技術と社会との関わり方を学ぶために必要となる基礎的な知識・技能を有しているか、そして論理的に思考・判断し、さらに表現する力を有しているかどうかを評価することである。